

# 比較思想とは何か

久野 昭

## 比較思想の思想的意味

比較という操作が問題になるのは、同一ならざるものについてである。同一ならざるものを合わせることに、あるいは等しからしめることが、比較と訳される西欧語の原義だったかと思われる。たとえばギリシア語の *synhairesis* はもと投げあわせることであつたし、ラテン語の *comparare* は等し (*compar*) からしめること、組みあわせることを意味していた。ドイツ語の *vergleich*en も等し (*gleich*) からしめることであつた。私たちの国のくらべるといふ言葉も、くりあわせるの意味をもっていたであろう。そして、投げあわせるにせよ、組みあわせるにせよ、くりあわせるにせよ、そこで合わせられるものは、もと離れていたもの、別個のものであり、また、等しからしめられるものは、もと等しから

ざるものである。それを合わせ、等しからしめるといふ(比較の)主体の側の操作なしに、比較ということは考えられない。

とりわけ思想について比較がなされる場合、この主体の側の操作は重要である。なぜなら、比較されるそれぞれの思想がまさに思想としてそれぞれに主体的な性格のものである限り、それらは本来同一のもの、等しいものではありえない。客観的には、それらは互いにあくまでも特殊であり異質である。そのそれぞれに特殊であり異質である思想が比較の主体によってくりあわせれ等しからしめられること自体、すぐれて主体的でもあれば思想的でもあるたぐいの事柄であろう。

このたぐいの事柄は、およそ主体的な思索のはたらきなしには成立しまい。その限り、それは特殊を媒介にするが、しかし、かく思い考える主体の内面において、それなしに思想のありえぬ言

葉がたくられ、くりあわされることによって、かえってその特殊なはたらきが普遍につらなっていくという方位を想定しえないとしたら、それは思想的な事柄であるよりは、たんなる思いつき、ないしは思いこみにとどまるだろう。特殊な主体の内面においてなお普遍をめざす、そういう理的な性格を、思索はもつべきだろう。そして、一般に比較ということが思想の場で基本的に困難に逢着せざるをえないのも、この要請ゆえにである。ただ複数のものを並列的に見やうして似てるの似てないのとあげつらうだけならば、ことは簡単である。

思想をくらべるとは、そんなことではない。むしろ、思想と思想をぶつけることだ。くりあわさるには、まず、互いに異質な特殊と特殊がぶつからねばならぬ。が、もとよりたんなる衝突では比較にならない。思想と思想が比較の主体によってぶつけられることで、そこに主体自体の質的な飛躍が生じるような、そういうぶつかりようが問題なのである。

飛躍とは飛ぶことである。飛ぶとは宙を動くことであり、宙は地面から離れたところである。従って、比較の主体自体の飛躍は、その主体のこれまでのありかたにいえば非連続の要因をもちこまずしては成立しない。そして、その飛躍が質的な飛躍である限り、この要因は主体自体の自己否定と結びつかざるをえない。

ある思想についての知識は客観的たりえても、思想それ自体は主体的なものとして相互に特殊であると、わたくしは考える。そ

の相互に特殊な思想を比較して自己の思想の内裡にくりあわせる。その比較の主体自体が自己否定の契機を含むこと、そういう契機を通じて本来的な自己のありかたにむかう、ことなしに、比較思想に思想的な意味は出てこないであろう。

そのことは、互いに異質な思想と思想とがぶつかる衝撃を比較の主体がどううけとめるかに、かかわってくる。この場合、比較の主体は知の主体でもあるが、その知とはたんなる対象的知識にはとどまらない。思想についての対象的知識の量的拡大とは次元を異にしたところで、知の主体が思想と思想との衝突の場に自己をも投げあわせていくような自己投企を通じて、この衝撃を主体的にうけとめつつ本来的自己にむかって自己を更新（変様）せしめていくたくい知のはたらきが、そこになければならぬであろう。そして、このはたらきには、それなりの修練が必要であるう。

### 比較思想と比較文化

井上哲次郎らの『哲学字彙』は、明治十四年（一八八一年）版、明治十七年版ともに、*culture* に修練をあてている。*civilization* の訳語は開化である。明治四十五年版にいたって、*culture* の訳語として、修練、人文、禮文、禮儀、修養とともに文化があげられたのであった。ついでだが、同じく明治四十五年版で、*civilization* に開化とならんで文明および文化の訳語が出てきている。

古代ギリシアの *Polis* (夷狄) と *polites* (市民) との対比から発想上はなれがたい文明 (civilization) に対して、文化 (culture) がまず修練としてうけとめられたことは、注意しておいていい。このうけとめかたは、まちがってはいま。

耕作、崇拜、祭祀を意味する *cultus* と同根の *cultura* が、もとの耕作の意であり、転じて靈魂を擧り、おこすことをさすにいたったことは、よく知られている。そのような *cultura animi* として、キケロあたりから、哲学が評価されるようになったことも。その哲学とのかかわりからすれば、とりわけ *anima* (靈魂) の本来もつ知のはたらきの修練、このはたらきをおこすことが問題になるだろう。おこすとは、息づかせ、生かしめることである。眠っている者をおこすにせよ、火をおこすにせよ、それが本来もっている、ただし、いま隠蔽されているはたらきを、あらわならしめることである。わたくしは、そのようなニュアンスをラテン語の *colere* はもっていたと思う。だからこそ、この動詞から出た *cultus* が耕作や祭祀を、また *cultura* が耕作や修練を意味しえたのである。

さて、そのような修練の所産として文化をとらえた場合、文化はまさにそのような修練のありようによって規定される。さればこそ、文化については市民的か夷狄的かという価値標準よりも、それぞれの文化のもつ位相、その地域性や時代性が尊重されるべきだし、また、知的修練がそれなしにはありえぬ言語とのかかわ

りが重視されねばならないだろう。

*cultura animi* として思想の意味をもつにいたった哲学もまた、当然、かかる修練のありようによって規定されざるをえない。哲学的思索が本来、主体的な知のはたらきの修練であるなら、それはかえって、文化の位相に大きくかかわってくる。普遍妥当な客観的真理ならば、それを追求する主体を捨象しきっても自立しようが、たんなる対象的知識およびその追求法の一形態たりえない哲学的思想においては、主体を捨象することはできぬし、とすれば、主体と文化とのかかわりも捨象できない。そのような要因をも含みながら知のはたらきが修練され、思想が形成されると考えられるからである。そして、これは思想と思想とが比較される場合、それらと比較する主体の側が思想的にかかえている問題でもあれば、また、比較されるべき思想がかかえていた問題でもあることに、留意しておきたい。

比較思想に不可欠な思想と思想との衝突の背後には、かくて主体的な知の修練のありようの衝突があり、互いに異質な文化と文化との衝突がある。ただし、むしろ、わたくしは思想なり文化なりの普遍性を全く否認するものではない。ただ、その思想の普遍性が思索する主体の特殊性と無縁にありえぬこと、文化の普遍性がいわば文化の土着性と切りはなしがたいこと、そういう特殊性や土着性をかいくぐってのみ意味をもつ普遍性であることに、まず留意すべきだと思ふのである。そして、いま、かいくぐる

いう表現をとったそのところで、比較ということが大きな思想的意味をもつてあろう。

たとえば、それぞれの精神的伝統や風土的条件のもとに形成されてきた互いに異質な文化を比較することを通じて、人間にとって文化のもつ普遍的な意味があらわになるような、そういう方向性を比較文化研究はもつべきだと、わたくしは考えるが、かく文化のもつ普遍的な意味があらわになるのは比較の主体において、比較という操作によってでなければならぬ。そして、そのような比較文化の一環としての役割をも、比較思想はもつはずなのである。

(くの・あきら、比較哲学、広島大学教授)